

私の志

唯一無二の着物作家

風を感じさせるばかり染め
「風彩染」を描き続ける。

人気漫画雑誌でデビュー直前まで努力を重ねた後、父の着物工房で4代目として研鑽を積む。美しいばかり染めを手掛ける一方で、チャンパンがテーマの帯を作ったり、依頼を受けてアニメを題材にした着物を描いたり、斬新な作品も話題に。自由な心で着物の未来を拓く、若き着物作家を訪ねました。

漫画も着物もストーリーが柱

——小学生時代は漫画家を志しておられたと伺っています。

加藤 繊細な子どもだったようで、学校が嫌いでした。一人で「少年ジャンプ」に親しむうち、漫画には「生きていきたい」と思わせる力があることを感じ、自分もそんな漫画を描きたいと思うように。6年生のとき、漫画家になるという志を立てました。

かとう ようへい
加藤 洋平 さん（着物作家）



——同志社大学に來られた動機をお聞かせください。

加藤 両親がせて大学は行つてほしいと言つたので。文化史を選んだのは歴史というか、人の心を知りたかつたからです。漫画の題材がたくさん拾へそうという期待がありました。大学では1年生のときは勉強したのですが、後の3年間は「同志社ワーキングコース」に打ち込みすぎて、漫画も一時休止しました。1年かけて子どもたちが感動するキャンペーンを作り上げる点や、毎日いろんな子どもと出会う点など、漫画や着物の創作と非常に似ていると思います。

——卒業後、「少年ジャンプ」で大きな賞を獲られました。

加藤 「ストキン炎（ファイヤー）」という賞をいただき、担当さんも付きました。その前から並行して着物の仕事をしていた、一番しんどい時期でした。自分の作品もまだない状態で、両親の手伝いをしに着物の展示会に行ったときのことです。あるお客様と話が弾み、あなたの着物が欲しいと言われました。店員さんが適当なものをその方に勧めていましたが、僕は何も言えなかった。自分の作品を創りたいと思つた瞬間でした。お客様に喜んでいただくことやりがいも感じていたし、当時はすごい漫画家が居並ぶ中、自分の存在価値があまり見出せないという苦悩もあった。着物だと、自分の方向性や表現に意外性を見出していただ

き、喜ばれる体験をしました。それらが全部絡まって、徐々に着物で生きていく気持ちが高まりました。

——漫画と着物の世界に、何か違いはありましたか。

加藤 全然なかったです。漫画は僕がストーリーを考え、着物は着た人がストーリーを作っていくという違いはありますが、ストーリーがあつて誰かが主役に立つてくれるという点では、僕の中ではまったく一緒です。きれいな着物をつくるのはもちろんですが、その人が着て、誰かと出会う、賞賛される。そういうストーリーが生まれる着物をつくるのが僕の仕事です。

——加藤さんのぼかし染めについて教えてください。

加藤 うちの工房の2代目が考え出して、僕の父、母、叔母が完成させました。ぼかし染めに「風」という概念を持ち込み、技法だけでなくデザインや心の表現として「風彩染」という名で商標登録しています。普通は表から濡らさずに染めるので完成時の予想がしやすいのですが、僕の場合は裏から濡らしながら染めていくため、仕上りの予測が難しい。手を止めるとそこで乾いて跡がつくし、一貫して同じテンションで染めることが重要なので、一反を染めるときは一日ずっと染め続けます。昼の12時から深夜1時

まで、ノンストップ作業を5日続けたときは倒れました。「鬼滅の刃」的に言えば「全集中」でした（笑）。

必然性と挑戦を軸に新しい「風」を染める

——創作のエネルギー源や大切にしているものは何ですか。
加藤 創造の源は「人」です。人と喋りながら表現を提案して全体像をつくり上げる。その人が好きなものの立場に立ち、それが未知の世界であれば掘り下げて勉強する。すると自然に、デザインにおいてお客様との間に齟齬は生まれなくなります。その上で大切にしているのは必然性と、



誰もやっていないということ。色やデザインで絶対にこう描かなければいけないという確信が、腑に落ちているかどうかです。例えば、桜を描くのであれば、桜の色は絶対にこの色でなければ全体の空気が違うという必然を感じているかどうか。

それがないと迷います。誰もやらないことをしたいという思いは、漫画を描いていたときと同じです。だから苦しかったし、そういう戦いが今も続いています。

——伝統工芸の世界はどこも新たな活路を探っておられることと思います。加藤さんはどのようにお考えですか。

加藤 僕がこの風彩染を始めた頃は、着物も含めて世の中がシックなものを好む時期でした。風彩染は色とりどりですから、合う人には合うけど、合わない人には合わない。だからその頃から、絶対にこの風彩染を貫かなければと思っています。そうすれば喜ばれるときの「喜び値」がすごいし、こちら自信を持って「あなたにしか合いませんよ」と言える。そこから差別化が生まれて、貫くことで生き残っていくのではないのでしょうか。大事にしてください。呉服屋さんは増えていってます。

——工房体験、扇子や傘・カーテン創作など、着物以外にもチャレンジしておられますね。

加藤 最初は工房体験を、「おあつらえ」の世界への入り口にしようと考えました。刷毛で絵を描いていただき、僕たちがその人から感じた「風」を染める。それを扇子などに仕立てて一点物を作る体験です。その作品は、たとえば小



さくてもその人の「風」になる。その体験が着物につながればという期待が大前提です。着物を着てお客様とお出かけをする「ろーじ」というイベントも2011年に始めました。コロナで中断していましたが、今春から再開する予定です。若い層には着物と縁のない人が多いですが、一度着てみると良さや楽しさを分かっていただけるようです。

——最も達成感を感じるのとはどんなときですか。

加藤 「こんな着物、見たことない！」と喜んでいただけるときです。それが原点であり、終着点もそこしかありません。先日は「モーメント・ファクトリー」の方たちが訪

ねてきてくださいました。東京オリンピックの閉会式やシルクドソレイユの演出などを手がけているカナダのデジタルアート集団で、僕の風彩染を気に入ってくださったんです。そういうことも非常に嬉しいですが、やはり着物の価値というのはお客様との一対一の勝負に帰結するのかなと思います。誰かを元気づけたくて漫画を描きたいと思い、お客様に喜んでいただきたいと思って着物をつくる。やっている事は同じなのかもしれません。

——未来へ向けてひと言お願いします。

加藤 風彩染の「風」とは「心」のこと。「時代の風」という言葉もあるように、日本人独特の感じ方です。風彩染はまさに、ばかしのためにある名称なんです。風彩染は動くときにこそ美しい。流動的な動きや空間表現に向いていると思っています。モーメント・ファクトリーさんと一緒にインスタレーションなどが実現するいいなと思っています。もちろん最後は着物に戻って、染め続けていきます。
(2022年12月1日、京都市の工房にて)

私の志

武者修行中の新人官僚

目標を掲げて努力を続ける。
それが私の生き方です。

小学生の頃から将来の目標は、政策立案に関わることに。計画通りに着々と歩みを進め、2020年4月に環境省に入省。現在、厚生労働省健康局難病対策課で国政の重要課題に取り組む、若き卒業生を訪ねました。

フィールドワークでの気づきから環境省へ

——現在の道へ進まれたきっかけをお聞かせください。

田中 岡本由美子先生のゼミで国際協力について学びました。地球規模の課題について考察し、途上国での持続可能な開発を進めるための課題の解決法を探るため、フィールドワークの一環で東アフリカのウガンダを訪問。コーヒー小規模農家の持続可能性の調査やマバンバ湿地エコツーリズムなどの実態調査を行いました。そのとき持続可能な発

たなか ゆりか
田中 優理香さん
(厚生労働省)



展を考える上での環境への配慮の大切さを学び、環境行政に対する関心が強まりました。そういう意味でも大きな経験でした。

——なぜエコツーリズムに関心を持ったのですか。

田中 フィールドワークで訪れたマバンバ湿地に生息するハシビロコウは、巨大なくちばしを持ち、しばしば凝固したように動きを止めることから、「動かない鳥」としてマバンバ湿地のエコツーリズムでも人気があります。でも今や生息数は、世界全体でたったの5千～8千羽。国際自然保護連合（IUCN）のレッド・リストでも絶滅危惧種に分類され、個体数が激減しています。途上国に限らず、経済問題のように自分に直接関係してくるような1・2年先の自分の生活に目に見えて影響が表れる事なら皆が真剣に取り組むけれど、自分の直接の財産ではないようなもの、とくに影響が返ってくるのが何十年か後という環境汚染や気候変動問題については自分ごととして考えにくい。エコツーリズムをはじめ、こうした事は民間に任せていてはうまく回っていかない、長期的な視点に立った取り組みは行政しかできないのではと考えるようになりました。

——そこからキャリア官僚を目指されたのですか。

田中 国家公務員になるのは小学生時代から決めていました。何もかもがトップダウンでできるわけではないですが、物事を進めていくためにはある程度政策の力が必要だろうと考えたのです。同志社から省庁に進む人は多くないので、大学入学時から試験に向けた準備を始めていました。

——希望通り試験に合格されました。勉強法を教えてください。

田中 基本的に一人で勉強しました。キャリアセンターの公務員講座は少し利用しましたが、セカンドスクールにも行きませんでした。頼りにしたのは参考書のみ。目標を決めたからには、それに向けて努力しないといけないという自持がありましたから。「政策立案に携わる」という強い気持ちを持ち続けたことが、目標達成につながったのだと思います。最初からこれは無理とか不可能とか、自分で限界を決めてしまわないことが大事だと思います。

——同じ目標を持つ仲間はいなかったのですか。

田中 キャリア官僚の大半は東大・京大卒で、同志社からこの道に進む人はとても少ないです。私の周りに一緒に頑

張る同級生もいませんでした。国家公務員試験は合格が難しいし、総合職としての採用もごく少数という狭き門です。当時はゼミ仲間や友達との飲み会にも参加しなかったのが、人付き合いが悪いとは言われました。でも孤立していたわけではありません。ゼミ活動を通じて仲間と意思を通じ合わせ、充実した時間を共有することができました。ゼミでの経験とここで得た仲間は私にとって人生の財産。それだけでも、同志社を選んで二重丸だったと思っています。

国立・国定公園の魅力を広く発信したい

——環境省ではどのような仕事をされましたか。

田中 環境保全に関する基本的な政策の企画等を行う大臣官房総合政策課に配属され、環境省の「戦略部門」として総合調整を行っていました。また、他省庁とやり取りすることも多かったのです。例えば消費者基本計画や国土強化基本計画などの策定時には、環境省側の意見をまとめ、計画に反映させる作業をしていました。

——厚生労働省に異動された経緯と現在の仕事内容を教えてください。

田中 入省して1年3カ月後の2021年7月に、人事異動で厚生労働省健康局難病対策課へ移りました。省庁間の異動は外から自分の省を眺めたり、他制度に触れるよい機会。そろそろ環境省に戻る予定です。ここでの主な業務は法令等の改正です。昨年12月の臨時国会に提出され、12月10日付けで成立した「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律等の一部を改正する法律」の改正作業に携わり、そのうち難病の患者に対する医療等に関する法律と児童福祉法の審査を行っていました。審査期間中は午前3時頃まで働いて、ちよつと寝て、すぐ出勤してというような毎日。人員の多くがコロナ関連業務に割かれていたとはいえ、残業が多く、やめたくなるほどしんどかったですね。法改正という大きな仕事を成し遂げた達成感、充足感がありますが、この仕事の大変さを改めて思い知った体験でした。

——ジェンダーによる働きにくさは感じますか。

田中 働き方にジェンダーの区別があるとは思っていません。職場では、家庭を持ってキャリアを積んでいる女性も

たくさんいるし、男性であっても育児休暇を取得するなどして積極的に育児に参加している人もいます。既に女性・男性と分けて考える時代ではないのではと感じます。

——忙しい日々を乗り切るためのリフレッシュ方法があれば教えてください。

田中 最大のリフレッシュ方法は大好きなディズニールンド・シーに行くことです。普段はA.B.C.Nというアイドルグループの音楽を聴いて癒されています。大学の3年生前期まではダンスサークルに所属していたので、もう少し余裕ができればダンスも再開したいですね。

——志をお聞かせください。

田中 どこかのタイミングで自然環境保全、とくに国立公園の保全や整備に携わりたいと思っています。環境省の業務は4割が地球温暖化、4割が廃棄物関係、残りの2割くらいが国立公園など自然環境と水保病を含む保健関係です。地球温暖化問題はもちろん最重要課題ですが、自然保護・生物多様性保全の観点からも、国立・国定公園の役割がもっと注目されてもいいのではないのでしょうか。今、問題になっているのが公園の管理不足です。日本中にいっぱい魅

力的な国立・国定公園があるのに、残念なことにその自然環境の素晴らしさがうまく伝わっていません。人が訪れる仕掛けが考えられたいと思います。そのほか環境省ではJリーグとの連携協定を締結し、地域に根ざしたSDGsの取組の推進を図るということも行っています。このように環境を切り口としてさまざまなものと連携し、国民にアピールできるような企画をしていきたい。さらにインターネットを活用してインバウンドなどにも結びつけて活性化を図っていかれたらと、構想を膨らませています。

(2023年1月27日、東京にて)